

熱海市伊豆山土石流災害から考える
「津久井農場計画:志田峠の巨大盛り土計画」阻止の紹介
「違法盛り土に毅然と対応した」紀北町の紹介

盛り土問題とは

盛り土問題は多岐にわたり、人工的に盛り土をして造成された住宅地の土台が崩れる「宅地崩壊」の発生等も含まれます。阪神の震災では兵庫県西宮市では盛り土で地すべりが発生、30人が犠牲になりました。東北の震災では谷埋め盛り土が送電線鉄塔をなぎ倒し、原発の電源喪失に至りました。被害が出るたびに法律が改正されています。

ここでは伊豆山と同様な建設残土と産廃等による狭義の不法盛り土問題について市民の目線から述べます。法律と土木工学のお話は別稿でいたしましょう。

盛り土問題の解決策

未然に防ぐことを根幹とし、既存の盛り土について対策すれば不法盛り土はなくなるはずです。計画段階、積み始めた初期段階で中止させるべきです。それは机上の空論ではありません。その解決例として「志田峠の巨大盛り土計画を未然に防いだ」「違法盛り土に毅然と対応した紀北町」の事例を紹介します。

志田峠の津久井農場計画中止までの経緯

- ・ツイッターXでの発信
「津久井農場計画」を考える おかしなことだらけの巨大盛土造成計画 残土問題 相模原市 愛川町 志田峠 @shidatouge
<https://x.com/shidatouge>
- ・フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』津久井農場計画
<https://ja.wikipedia.org/wiki/津久井農場計画>

【S氏の体験より】

現場は動いています。活動を牽引されたS氏のXアカウントのリンク貼りを申し出た昨年の時点では盛り土計画進行中でした。昨年7月に中止決定、今年2月に小池隆氏によりウィキペディアに立項されました。これは優れてわかりやすい記述なので拙文は不要であり、S氏の意見を紹介するにとどめます。その辛酸と業績が伝わりますように。

- ・最初に気づいたきっかけである計画のいい加減さ、業者の嘘つきぶり
「大手のゼネコンが会社ぐるみで悪徳事業の片棒担ぐなんてあり得ないだろう」と思っていたら、出鱈目な計画に気づいて驚いた。事業者が行政に「住民は転居予定」と虚偽の報告をしていたことが明らかになり、これが住民の怒りを決定的なものとしました。実際には転居を予定している家庭など一軒もなく、住民の意向を無視して事業が進められていたのです。そんな見え透いた幼稚な作戦は、住民を舐めていたからだろうと思います。

・発信が活動を推し進めた

ツイッターを始めたところ、取り上げてくれたジャーナリストがいました。業者の説明、それを発信していたら、専門の人がそれはおかしいとコメントしてくれた。匿名のゼネコンの関係者も調べてくれた。結果として業者のいうことは出鱈目だとわかった。業者は難しい専門の安全の数字をだしてきて、嘘で塗り固めていたのです。

提供された正しい資料をもとに、行政に「これはどうですか」と相談すると、最初は良い人として対応してくれていたのが、だんだん対応が変わってきました。

その行政とのやりとりと、地元民の恥とも言える妨害活動も忖度なく発信していた。

そのうち、「国がやっている事業だから決まっている」などのデマが出てきた。民間の営利目的の事業なのに。

・発信の本質とは

私からの質問「なぜ専門家の共感を得られたのでしょうか」に

「事実の発信につきる」とおっしゃられているのが全てだと感じました。

・眞の同志がいたからこそ

集団の中での動きづらさ、疲労は本当によくわかります。地元民が買収されたあたり（チラシを作り始めたのはこの時期）からものすごいストレスが掛かり続けています。何度も抜け出して自分の意思で動くことを考えましたが その度に本気で問題に取り組む同志から止められ現在に至っています 集団に属しているから行政も相手にせざるを得ない、自治会から抜けて任意団体となった途端に向こうの思う壺になる、偏狭な地域性から正論を唱えても異端視されるのだ、など… クレバーな助言者のおかげで活動が続けられたと思います。

・力になってくれた議員さんとの関わり

政治家を頼ることへのためらいがありました。議員さんにお願いすることになりました。業者と政治家がつながっていて、さらに地元の有力者とつながっていたり、闇が深いことに気がついた。一人、力になってくれた議員さんがいます。与党、野党、政党関係なく、人間の資質だと思います。市民が議員にお願いすることは、正当なルートだと学びました。

・リニア計画についての S さんの見識

牧場を作るという名目のリニア残土の受け入れだったという疑いが濃厚です。リニアだからダメというのではない。人に迷惑かける事業はだめだということです。

・法改正に関与できたこと

国会議員がつないでくれて、盛り土規制法の改正についてもコミットできた。

従来のガイドラインの不備を指摘できた日経クロステックに大きく報じられた。

社会の役に立てたのはよかったです。

・暴力団、反社組織を匂わせるやり方に対抗するには

牧場計画推進派から、住民に対して「暴力団組織が関わっている」と電話がきた。嘘に決まっているし、むしろ暴力を受ければこちらの勝ちだと思っていた。しかし自分には脅しきはなかった。恐れることはない。

・お金で切り崩されたこともあった。

賛成派の住民から、業者が公民館を建ててくれるなどという提案が出された。

・熱海土石流の影響

計画反対の住民署名を市長に手渡したのが 2021 年 6 月 28 日、直後の 7 月 3 日に伊豆山で土石流が発生しました。津久井農場の計画通りに盛り土されたら、専門家から遅かれ早かれおこると指摘されている「谷埋め盛り土の崩壊」そのものである。イメージしていた土砂災害がそのまま現実のものとなってしまったのである。伊豆山の災害から津久井農場計画を連想されて、マスコミの取材を受けました。計画の不透明性、土石流に対する住民の懸念がひろく報道されました。伊豆山の多数の犠牲者と被災者をとても他人事とは思えず、被害者の会の瀬下会長の講演を聞き、現地を訪れ、「TRUTH」の発表会に参加、伊豆山の復興に心を寄せている。また、裁判で行政の不作為がどのように裁かれるのか注視しています。

・今後も戦いは続く

中止を決定しなければ、潜在的な現在進行形だと警戒せよ。中止決定しても、新手の開発者が現れる。隣接の志田峠には、今も違法盛り土が存在している。その土地を見守り、撤去を求める続ける。隙があれば業者はつけ込んでくる。

住民運動でストップ 紀北町の盛り土問題の紹介

伊勢新聞木村輝哉記者の丹念な取材による記事をごらんください 2025 年 7 月 28 日配信

〈まる見えリポート〉紀北町の盛り土問題 撤去の見通し立たず浄水場への影響懸念も 三重

https://www.isenp.co.jp/2025/07/28/133020/#google_vignette

【経緯】

三重県紀北町では町会議員による違法盛り土事件が起きましたが、住民の運動により、他の盛り土事件と比べて比較的初期にくいとめることができました。

飛地の盛り土面積を合計すると県の条例に抵触し違反していること、盛り土の不届と住民説明会の不開催が紀北町の条例(2019 年制定)に反する違法盛り土であることを町民が指摘し、処分と原形復旧を求める多くの署名が町に提出されました。訴えを受けて行政は動き、盛り土の責任者に停止命令、盛り土の撤去命令、刑事告発し、毅然と対応しました。盛り土の初期段階でやめさせることができたのは、故郷の自然と水源を守るための住民の団結があったからです。

【以下、思うことを述べてみます】

・違法盛り土に反対まがいの人物が絡むのはよくあることです。原因者の町議会議員が反対のものと噂されるほどの犯罪歴があることから、人物のユニークさが事件の本質だと考えるのは間違っています。伊豆山の発災当初、前所有者が同和団体の幹部で恐喝の言動があったことから、「似非同和の起こした事件」という矮小化、陳腐化がされて真の原因から目を逸らされました。

・土地の所有権を業者間で委譲し、責任の所在を曖昧にしている可能性があります。

- ・違法盛り土事件の課題である、この土砂を誰がどうやって片付けるのかは解決していません。代執行は税金です。伊豆山でも悪質業者のやり得になりそうです。
- ・上記は違法盛り土問題にはセットです。共通しているのです。典型的な事件です。
- ・刑事告訴と関連会社の素早い財産の差し押さえ、今後の法改正はそこまで踏み込んでいくことを希望します。
- ・どこからきた残土なのか

関東から紀伊長島の港へ船で運ばれてきた可能性が高いのです。

付近の山が削られ、建築資材として売られる。その痕が残土で埋め立てられる。そういう実態があります。今後も首都圏の取り締まりが厳しくなれば、紀伊半島に流れてくるでしょう。建設残土の動きは全国レベルでの監視が必要です。

【まとめ】

月並みなまとめになりますが、違法な産廃と盛り土を防ぐには、市民が郷土を守る意識を持ち、団結してまとまることが必要だと訴えたい。

そして、専門家の協力が不可欠です。土木と法律の専門家は、一目見れば違法なことはわかるはず。エキスパートとしての倫理観を問いたい。見て見ぬ振りをしていませんか？
まず発信、クレバーに事実を伝えることが有効なこと。

マスコミに期待するのは、何者にも忖度しない公平中立に深掘りした報道。

はなはだまとまりのない文だと自覚しています。盛り土問題とは素人が全容を掴むのは難しいものであることをご理解ください。当事者としてのやむにやまれぬ心から書いております。今後望むのは、実力ある専門家、技術者、識者からの社会への発信です。

伊豆山の土石流も防げたのかもしれない。百万回の後悔とともに、津久井牧場計画と紀北町の事件を紹介させていただきました。

2025年12月15日 文責:伊東真由美